

---

# ダイアリー（、あの時僕らは確かに）

木村

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ダイアリー（あの時僕らは確かに）

### 【Zコード】

N9168M

### 【作者名】

木村

### 【あらすじ】

重い病を抱える妹を持ちながら、自身は二重人格障害に悩まされている耕介。

そんな耕介の前に突如現れた転校生、薫。

彼女は耕介の生活を、心を次々と変えていく。

耕介はそんな薫の姿に惹かれながらも、だんだん大きくなる心の闇をはらえないのでいた。

あの頃の僕らは若くて考えが浅はかだったけれど、

それでも、確かに僕らはいた。

小説中に病気がいくつか出でますが、すべて作者の考えた架空のものであって、現実のものとは異なります。

あの時の僕らは、まだ未熟で、考えが浅はかで、それでも、確かにその時を生きていた。

彼は心配でならなかつた。

「おい葉月、本当に一人で大丈夫なのか」

「さつきから大丈夫だつて言つてるでしょ。私もう中学三年だよ？ほら、早く出ないと学校に遅れちゃう」

葉月が静かに咳をする。葉月にとつて風邪を引くことぐらい日常茶飯事であつたが、それでも可愛い妹が一人家に残るとなれば耕介にとつては心配でいっぱいであった。

「でも」

「さ、行つてらつしゃい！」

「…わかつたよ」

耕介は仕方なく足元に置いていた鞄を拾い、部屋を出よつとした。

「そうだ」

「何お兄ちゃん、まだ心配してゐるの？いい加減にしてよね」「いや、今日病院の日だからさ、ちょっと帰り遅くなるわ」

そつか今日が病院の日か、と葉月が漏らす。

「わかつた。遙子さんによろしくね」

軽く手を振つて、耕介は葉月の部屋を出た。

大丈夫、俺は耕介なんだから、きつと皆笑つてくれる。

教室のドアをガラリと音を立てて開ける。さつきまでざわついていたクラスメイトが耕介を見た途端にしんと静まつた。耕介は胸が

チクリと痛むのを気にしなによつにしながら言つた。

「みんな、おはよう」

その瞬間クラスメイトは普段通りの顔に戻り、それぞれでさつきまでしていた会話の続きをし始めたり、耕介に挨拶をしたりしてきました。

「こーすけ、おはようーー！」

「ねえ耕介くん、宿題やつてきたあ？」

ほら大丈夫、耕介には皆が笑つてくれる…。

「ぐつもーにん、こーちゃん！」

後ろから思い切り耕介の背中を叩いてきたのは、親友の阿瀬南あせみなみだつた。

「いってえ、お前だからそれやめろつつつてんだろ、南！」

南はいつも笑顔で、目を細めて笑う。耕介は南の笑顔が好きだつた。

「そういうや聞きました？鳴海なるみサン。本日我が2・5に転校生が来るらしいですよお」

「ほお、その情報は確かかね、阿瀬クン」

「わたくしの情報網をなめてもらひちや困りますねえ」

「仲良くなれたらいいな」

耕介はそう言いながら、その転校生が自分を奇異の目で見ないような人であることをひたすら祈つていた。そんな耕介の思いも、南は感じていた。

「きっと大丈夫だよ、耕介なら」

「おい南ー、ちょっとこいつち来てくれよー」

クラスメイトの呼ぶ声に応えて南はいなくなつてしまつた。喋る相手もいないし何もすることのない耕介は、自分の机でSHRまでひと眠りすることにした。

そういうや葉月…ちゃんとおとなしくしてゐかな…。

チャイムの音がする。S H R 開始のチャイムだ。

「なあ耕介、今日の宿題でさ…」

右隣の水野が話しかけてきた。しかし、そこにいたのはさつきまでの耕介ではなかった。

「…下の名前で呼ぶなつつひとつんだろ」「さつきがさつきと違つて鋭い。水野は、しまつた鳴海の方か、と思つた。

「「「メン、鳴海」

「おはよーわーん、S H R 始めるぞー」

クラス担任である長居が教室に入ってきた。鳴海はもう少し眠りたかったのに、と思いながら重い頭を上げる。なんだかさつきと違つて機嫌が悪くなつていた。

「なーんと、今日は転校生を紹介するぞ。入れ！」

長居に促されて教室に入ってきたのは、栗色の髪の毛が肩あたりまで伸び、田をぱつぱつと開けた可愛らしい女子であった。

「えっと、桐生薫といいます。親の仕事の都合でこんな変な時期に転校してきました。よろしくお願ひします」

そう言つて薫はペラッと頭を下げた。

「じゃあ桐生の席は…鳴海の左隣な…」

なんだこの漫画みたいな展開は、と思うとなんだか馬鹿らしくなつて、鳴海はもう一度眠ることにした。

「あ、鳴海つてこの辺のほんの寝てるアホのことだからー。鳴海耕介！」

がははは、とがさつに笑つた。鳴海は、この暑苦しい教師が鬱陶しかった。

がたん、と椅子の動く音がした。おわりに薫が隣の席についたんだろう。

「桐生さん、よろしくねー」

水野のへらへらした声が聞こえた。

薫は瞬く間に人気者になつていった。一般受けするであろうルックスと性格が人気なようで、転校初日にもかかわらず薫の周りにはいつも誰かがいた。それと対照的に、朝と違つて機嫌の悪い今の鳴海には、人が自然と距離を置いていた。

四限終わりのチャイムが鳴り、昼休みとなつた。鳴海は携帯電話とオーディオプレーヤー、そしてコンビニで買ったパンが入つた袋を持つて立ち上がつた。一人で静かに昼食をとりたい気分だつた。

「おい鳴海、一緒に飯食おうぜ」

南は鳴海とは呼ぶが、何にも変わらず接してくれる。そんな南を鳴海は有り難いとは思う。"鳴海のとき"でも南と一緒に昼食をとるときがあつたが、今日はそんな気分になれなかつた。

「「」めん、今日はそんな気分じゃない」

残念そうにする南の前を通り、鳴海は教室を出ようとした。

「おい南、耕介は良いとして鳴海の時は放つておけよ」

クラスメイトが小さく話す声が聞こえた。

鳴海は屋上へ続く階段のところへ來ていた。

この学校の屋上へ入ることは基本的に禁止されていて、なのでこの階段に人が来ることは少ない。鳴海はこの場所で一人でいることが好きだつた。

階段に腰掛けて、まず携帯電話を開いてさつきの授業中に届いていたメールをチェックした。葉月からで、大分良くなつていて、心配しないで真面目に勉強してね、といった内容だつた。鳴海はふと笑みをこぼした。彼はこのメールが来てなかつたら、葉月に体の調子はどうだとメールをするつもりだつたからだ。

適当に葉月へ返事を返し、携帯電話を閉じてパンを食べようとしたときに、彼は前に誰かが立つてゐることに気付いた。

「桐生」

「あ、覚えててくれたんだ！」

そう言つて転校生はにこりと笑つた。裏のなさそうな笑顔ではあつたが、今の鳴海にとつては鬱陶しいものでしかなかつた。

卷六

「それじゃ、失礼して」

確かにしきりと断つたはずなのだが、薰は何も聞いてないよう

「めいめい、うそつこないで、おたかだくよ。」ふうう、海の隣にせりあた。

なに俺かどにか別のどこの行くわ  
薫の笑顔を見せて、なんのド、鳥海

「あつ、待つてよ。なる…耕介くん！」

「下の名前で呼ぶな!!」

また自分に腹立たしさを覚えた。

彼はそう言つて、その場を去つた。

- - - - -

いつの間にか重い気持ちは晴れていた。教室のドアを開けると、  
がそこにいた。

南がそこにいた。

「お、耕介！」

耕介が入ってきた瞬間体を強張らしたケテスマイトたちも、南の言で安心したようだ。

「なんだお前、まだ昼飯食べてねえの？」  
「ま、ちょっとねー

そう言つて耕介は自分の席に座ると、袋を開いてパンをかじり始めた。

一つ目のパンを食べ終わった頃に、薫が教室に帰ってきた。どこ行つてたの、と女子数人が彼女の元へ駆け寄る。彼女は耕介の存在に気付き、少し目をそらした。

「さつきはごめん、桐生。」今の”俺のことは、耕介って呼んで欲しいんだ」

え、と薫は返答に詰まる。さつきは下の名前で呼ぶなつて言つていたのに。そんな彼女を見た岡崎惠莉は、薫にそつと耳打ちをした。

「とりあえず、うんつて言つて」

「え、あ、うん。わかつた、耕介くん」

耕介はほほ笑んだ。

教室を出でから、恵莉は薫に事情を説明した。

「あのね、耕介は一重人格障害なの」

「にじゅうじんかく…」

薫は驚いたが、先ほどの彼の変貌ぶりはそれで納得できる。

「さつきまでのが、下の名前で呼ぶのを嫌う鳴海。すごいクールな方。今薫と話したのが、下の名前で呼んで欲しいつて言う耕介で、耕介の方は明るくてクラスでも人気かな。ま、鳴海の方が異常に下の名前で呼ばれるのを嫌うんだけどね」

「いつ2人は入れ替わるの？」

「さあ…当の本人もわかつてないみたいだからなあ。あ、ちなみに2人の区別がはつきりできるのは、うちの学校では阿瀬南ぐらいだから。阿瀬の話し方を見てから耕介に話しかけた方が良いと思うよ」

恵莉ちゃんは区別できないの、と尋ねると、恵莉は顔をしかめた。

「なんとなくはわかるんだけど、はつきりとは無理かなあ。また、とにかくあんまり深く関わらないほうが良いと思うよ」

薫は不謹慎とは思うが、なんだかこれから楽しくなりそうだ感じた。

「こんにちは」

放課後、耕介は病院へ行つた。病院と言つても、心理カウンセリングを専門とする精神科である。

病院の中には三つの扉があつたが、耕介は迷わず真ん中の扉を開いた。

「や、こんにちは耕介くん」

中には白衣を着た大野がいた。おおのよしこ大野遙子、彼の担当の精神科医である。彼女は彼に決して自分の事を先生と呼ばせない。“これはね、診察じやなくて私と貴方のお話なんだから”。これが大野の持論であつた。

「今日は何があつた？」

「ああ、うちのクラスに転校生が来たよ」

耕介は丸椅子に腰掛けながら言つた。

「どんな子なの？」

「女の子でね、転校初日から皆に囲まれてたよ。俺にも話しかけてくれたんだけど、鳴海の方だったから冷たくしちゃってさ……」

周囲もそうであつたが彼自身も、自分を区別するためにクールな方を鳴海、明るい方を耕介と呼んでいた。

「うん」

いつも大野は頷きながら彼の話を真剣に聞いてくれる。

「そのあと俺が出てきたから、さつきはごめんつて鳴海の代わりに謝つたんだけど、あの子すごく困った顔してた」

彼は手に持つたティーカップに目を落とす。紅茶に写る自分の顔。情けない顔だ。

「遙子さん、なんで俺は一人いるんだろ？」

「……耕介くんは、自分が鳴海くんか耕介くん、どちらか一人でい」と思つたの？」

「…皆混乱してる。皆に迷惑をかけてしまつなら、こんな状態は  
だめだと思う」

「どっちが鳴海耕介になるべきだと思つ?」

「…わかんない。元々の俺はどっちなんだろう、あいつなのかな。  
俺なのかな。…覚えてないんだよ」

いつからだつて、俺が一人になつたのは。

「私は、このままでも良いと思つわ。だつて、どちらも貴方じや  
ない」

「…だめだよ遙子さん…それじゃ母さんが帰つてこない…葉月が

…」

彼が帰つたあと、助手の一人である椎名<sup>しいな</sup>が大野に声をかけた。

「先生、今の子のカルテ見せてもらつてもいいですか。俺、あの  
子初めてなので」

「ああ、貴方は最近入つたばかりだものね。はい」

大野は椎名に鳴海耕介のカルテを渡した。椎名はそのカルテに目  
を通しながら呟く。

「冷静沈着で無口な”鳴海”と氣さくで明るい”耕介”…。今のは  
どつちなんですか?」

「やつきの子は耕介くんでしょ?」

ふうん、と椎名が不服そうな顔をするので大野はなによ、と聞い  
た。

「今のが”氣さくで明るい”子には見えなかつたんですけどねえ」

「氣さくで明るい子だつて気持ちが沈む時はあるでしょ?」

そうつすかねえ、と椎名はカルテのページをめくる。大野は、新  
入りのくせに軽い感じのする椎名にあまり良い印象を持つていなか  
つた。

「…あ、発症時期は不明なんすね」

「そう、発症原因もね。ここに通い始めたのは高1からなんだけ  
ど」

「 ”父親は長期出張中、母親は別居中、妹は生まれつきの病弱”  
…。うわあ、カオスな家庭だなあ」

「「」」

大野は別のカルテで椎名の頭を軽く叩く。  
「すんません。でも俺が思うに絶対発症原因はここにありますよ  
先程椎名のした口調で、大野はふうん、と呟いた。

あの時の場面がフラッシュバックする。

『いやよ。私、そんな耕介とは一緒に暮らせない』

：母さんの声だ。

『待てよ、お前出て行くのか。俺が長期出張なのに、子ども一人置いて出て行くのかよ』

：父さん。父さんの声だ。

『もうすぐ耕介は高校生なんだから、一人でも十分やれるわよ。  
私だめなの。こんな子とは一緒にいたくないわ！』

ずきん。胸が痛む。

葉月の泣き声がする。母さん出て行くなよ、葉月が泣いているじ  
やないか。

待つてくれよ …

「ただいま

頭が痛い。気分が重かった。

リビングのドアを開けようと中を覗くと、葉月が手紙を読んでいた。何も気付いていないふりをしながらドアを開ける。

葉月が焦つて読んでいた手紙を隠したのを、鳴海は見逃さなかつ

た。

「わ、お兄ちゃんお帰りなさい！晩御飯食べるよね？」

「ああ」

たぶん、母さんからだらうな。

鳴海は鞄をソファに投げ捨てながら考えた。

彼のことを異常なまでに毛嫌いしている母親は、対照的に葉月を溺愛していた。葉月は隠しているようだが、母親から数ヶ月定期にくる葉月宛ての手紙に、彼はとっくに気付いていた。

電話の無機質なベルの音が部屋に響く。

「あ、『めんお兄ちゃん出て』

あんまり俺のときは出たくないんだけどな、と思いつながら鳴海は受話器を上げた。

「もしもし」

『…』

受話器の先からは何も聞こえない。

「あの」

『…耕介か？』

一瞬名前を呼ばれたことにむつとしたが、聞き覚えのある声だった。もしかして

「…父さん？」

「えつお父さん…？」

葉月の嬉しそうな驚いた声が台所から聞こえてきた。

『やつぱり耕介か。久しぶりだなあ。葉月も元気か？』

「ああ、元気。電話なんて、一体どうしたんだ？」

「お兄ちゃん電話代わってよ…！」

葉月がはしゃぎながらやつてきたので、受話器を渡した。

「もしもしお父さん…？」、葉月だよ。元気元気」

葉月はそのまま父と話しこんでこむよつなので、鳴海は彼女が用

意してくれていた晩御飯のカレーを皿によそっていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9168m/>

ダイアリー（あの時僕らは確かに）

2010年10月14日14時41分発行